『敦煌寫本研究年報』第二號（2008.03）47-61 頁

宋代社會における『佛說天地八陽神呪經』の受容について——P.3759 から見えるもの

玄幸子

はじめに

元曲〈紫雲亭〉[1]のなかに、次のような一節がある。ヒロインの韓楚蘭が妓樓のおかみの口やかましさを歌う場面である。

> ［混江龍］他那裏問言多傷倖，絮得些家宅神長是不安寧。我勾欄[2]裏把戲得四五廻鐵騎，到家來卻有六七場刀兵。我唱的是三國志先饒十大曲，俺娘便五代史續添**八陽經**。你覷波，比及擡斷那唱叫，先索打拍那精神。起末得便熱鬧，團若得更滑熟。並無那唇甜句美，一劃地希險艱難，衡撲得些掂人髓，敲人腦，剝人皮，釘人腿得回頭硬。
>
> あのひとは何だってこんなに口やかましいのかしら、家神様だって閉口するほどくどいったらありゃしない。舞臺で鐵騎（どら太鼓の鳴り物入り演目）を四、五回したというのに、うちに戻ればまたいくさ物を六、七回。私が十大曲付三國志（諸宮調）を歌えば、おっかさんときたら五代史に八陽經を添えた（喧しいのとくどいのと盆正月が一緒に来た）ような大騒ぎ。ほらご覧！ 伴奏がこんなににぎにぎしいとくりゃ、まずは元氣を奮い起こさなきゃ。口上の小唄でこんなに賑やかなら、どれだけ上手に歌い上げる（もっと喧しくなる）ことかしら。聞こえよい響きはなし、一切がっさい胡散臭く、人の髄をひっぱり、脳みそ敲

[1]〔元〕石君寶（一作戴山甫）撰＜古杭新刊的本關目風月紫雲庭＞第一折、《元刊雜劇三十種》中巻（古本戯曲叢刊四集／古本戯曲叢刊編集委員会編 商務印書館）から抜粋。この物語のあらすじは次の通りである。
（あらすじ）歌妓韓楚蘭は秀才の霊春馬といい仲になるが、無理やり引き離されてしまう。韓楚蘭は霊春馬を宿場に送り別れの酒を酌み交わす。霊春馬が去って後長らく音沙汰がなく、韓楚蘭は寝てもさめても霊春馬を想っているので妓楼のおかみと對立する。後に韓楚蘭と霊春馬の二人は紫雲庭で再會し、めでたく大團圓となる。

[2]康保成〈“瓦舍”、“勾欄”新解〉、黄天驥主編《中國古代戯曲與古代文學研究論集》所收、2001年、中華書局刊。

き、皮を剥いで、脚に楔を打ちつけるような全くもってのひとくだり。（※下線・太字は筆者による）

元曲では、この例のように「八陽經」が口やかましさの代名詞として「五代史」とともに用いられることが多く、いくつかの工具書では語彙として取り上げ語釋を付している。例えば、《全元曲典故辭典》[3]では、＜八陽經＞を項目として立て、次のように說明する。

八陽經
［出典］《八陽經》是《八陽神呪經》的簡稱，另一譯名爲《八佛名號經》。這一經書的内容，是因舍利佛之問而說東方八佛的名號等等。
［釋義］《八陽經》因說八佛之名號，而名號拗口難記清，所以經常與撰述混亂局勢的《五代史》連用，形容鬧吵吵、絮叨叨的事物。
［例句］（從略――筆者）

また、《宋金元明清曲辭通釋》[4]では、先に例文を舉げた後、

八陽經，《八陽神咒經》的簡稱。戲曲中蓋借僧徒王復誦讀《八陽經》，諷刺說話囉唆、絮叨不休。唐牛僧孺《玄怪錄》卷三“吳全素”條：“沙門二人，當窗讀《八陽經》。”唐 闕名《知名錄》：“其家復有燈火，言語切切，沙門三人當窗讀《八陽經》。”是其證。（張相《詩詞曲語辭彙釋》釋“八陽經”為胡鬧，非是。）

と解釋している。「八陽經」を眞經の「（佛說）八陽神呪經」であると明確に記すものはこの二書の他にあまり例を見ないものの、別の工具書においても「五代史」とともに用いて「やかましさ」と「くどさ」を形容すると解釋するものが大部分を占める。上記の釋義において、「口がまわりづらく」「明瞭におぼえ辛い」ことが、なぜ「やかましさ」と「くどさ」を形容することに結びつくのか甚だ理解に苦しむが、それはさておき、他の用例も併せて檢討してみると確かに元曲では「五代史」とともに現れて「やかましさ」と「くどさ」を示す定型表現となっているようである。さらに二例を補足すれば、

無名氏[5]
［滿庭芳］教人笑倒，身不閑擾擾，口不住嘲嘲。把粉紅情罵做了，鴉青鈔生，拆散鳳友鸞交，<u>五代史般聒聒炒炒，八陽經般絮絮叨叨</u>。動不動，

[3]呂薇芬主編、2001 年、湖北辭書出版社、p.26。
[4]王學奇・王靜竹撰著、2002 年、語文出版社、p.17。
[5]〔元〕佚名《梨園按試樂府新聲》卷中 滿庭芳 四部叢刊三編所收。

尋人鬧羅織人左錯誰不怕俺娘焦。

＜重對玉梳記＞ 第二折[6]

［滾綉毬］(旦) 做娘的肯哀憐肯付合, 做女的有疼熱有瓜葛。指頭單養的我一個, 須不是過房買到前窩, 敖煎的點秋霜兩鬢皤, 擡舉我正青春二九過, 衣食勾家私得過, 因甚的鬧炒炒做不得個存活。每日間八陽經便少呵也有三千卷，五代史至輕呵也有二百合，又不是風魔。（※下線は筆者）

なお、ここでの「五代史」は當然正史ではなく[7]、宋代に都市の盛り場で發展した說唱文藝を指す[8]と思われる。講釋師の種本のうち歷史物については『新刊全相平話武王伐紂書』など五種が「平話」として元代に出版された。この五種以外に刊行年代不明の『五代史平話』が知られる。講釋師が語るその語り物としての樣子が、非常に賑やかなものであっただろうことは想像に難くない。では、「八陽經」は、どうであろうか。上記のような含意で定型表現として定着するには、しかも、元曲のなかで口にするのが歌妓であるからには、相當に俗社會で流行した背景がなくてはならない。では、竺法護譯眞經『佛說八陽神咒經』が人口に膾炙するほど宋代に流行しただろうか？

本論では、敦煌出土文獻の調査を通じて宋代敦煌さらには中原での「八陽經」の民間受容狀況を考察する。

一、敦煌文書中の『佛說天地八陽神呪經』と『佛說八陽神呪經』

敦煌文書中の「八陽經」に關する概況をまとめてみよう。『八陽經』と稱される資料には、現在大正新脩大藏經第八十五卷所收の唐代義淨譯に假託された僞經『佛說天地八陽神呪經』（No.2897）と大正藏第十四卷所收の西晉月氏三藏竺法護譯『佛說八陽神咒經』（No.428）の二種類がある。敦煌文書中でのこの二つの含有比は次

[6]〔明〕賈仲名著＜重對玉梳記＞第二折、《古本戲曲叢刊》四集之八所收。

[7]「五代史」に對する解釋も、《全元曲典故辭典》《宋金元明清曲辭通釋》ともに史實そのものを指すかのような解釋をしており、從いがたい。《全元曲典故辭典》では正史の《舊五代史》《新五代史》を出典とし、《宋金元明清曲辭通釋》は“五代，指梁、唐、晉、漢、周，歷經五十三年，十四個皇帝，政權頻繁更替，戰亂不休，是我國歷史上最紛亂的時期之一；因借以比喻吵鬧和紛亂”と說明する。

[8]說唱文藝としての「五代史（かたり）」の記述は名人であった尹常賣の名とともに《東京夢華錄》卷五〈京瓦伎藝〉および卷六〈元宵〉に見える。〈京瓦伎藝〉には、「三國志（かたり）」を意味する‘說三分’の記述も見える。また、陸游が幼少に「五代史（かたり）」を聞いた記述として《老學庵筆記》卷六に“俗說唐五代間事，每及功臣，多云賜無畏，其言甚鄙淺，予兒時聞之，每以為笑” とあるのを、胡士瑩《話本小說概論》では“所謂‘俗說唐五代’，無疑是說‘五代史’”（上册、p.101）と紹介する。

の通りである[9]。

	義淨譯假託の僞經	竺法護譯眞經
スタイン將来	**36** (S.0127, S.0252, S.0386, S.0480, S.0500, S.1062, S.1104, S.1222, S.1408, S.1472, S.1942, S.1979, S.2330, S.2910, S.3172, S.3234, S.3244, S.3324, S.3382, S.3468, S.3829, S.4287, S.4288, S.4360, S.4820, S.5261, S.5352, S.5373, S.5543, S.5673, S.5716, S.6266, S.6384, S.6424, S.6451, S.6667)	**1** (S.2643b)
ペリオ將来	**8** (P.3759a, P.3897a, P.3915e, P.4571, P.5579f, P.6016)	**2** (P.3915e, P.3924c)
北京圖書館	**53** (北 4232v 宇 76, 北 7611 宇 10, 北 7612 收 79, 北 7613 律 97, 北 7614 衣 57, 北 7615 龍 50, 北 7616 致 38, 北 7617 鹹 67, 北 7618 字 77, 北 7619?11, 北 7620 出 85, 北 7621 乃 76, 北 7622 官 50, 北 7623 列 38, 北 7624 鱗 9, 北 7625 調 58, 北 7626 姜 17, 北 7627 鹹 87, 北 7628 調 35, 北 7629 洪 41, 北 7630 冬 61, 北 7631 文 25, 北 7632 皇 28, 北 7633 收 55, 北 7634 來 73, 北 7635 師 72, 北 7636 號 85, 北 7637 珍 60, 北 7638 調 72, 北 7639 文 32, 北 7640 文 76, 北 7641 律 84, 北 7642 衣 3, 北 7643 龍 45, 北 7644 服 1, 北 7645 鳥 69, 北 7646 裳 4, 北 7647 潛 65, 北 7648 宿 85, 北 7649 餘 69, 北 7650 推 57, 北 7651 崑 27, 北 7652 裳 43, 北 7653 皇 33, 北 7654 陽 72, 北 7655 呂 11, 北 7656 位 10, 北 7657 金 64, 北 7654 始 54, 北 7659?14, 北 7660 裳 46, 北 7661 餘 34, 北 7662 餘 42)	
『浙藏敦煌文獻』所收	**2** (浙藏 060, 浙敦 115)	
『天津市藝術博物館藏敦煌文獻』所收	**1** (津藝 115)	
『北京大學圖書館藏敦煌文獻』所收	**1** (D102)	
『甘肅藏敦煌文獻』所收	**1** (敦研 354)	

[9]筆者が 2005 年 10 月に臺北で開催された第七屆唐代文化學術研討會で〈《佛說天地八陽神呪經》考——疑僞經如何流轉？〉と題して發表した際の會議論文に添付した表 1,2 から、《敦煌遺書總目索引新編》（敦煌研究院編、中華書局、2000.7）の誤植と思われる北 7610v、北 7659、北 7610v の 3 點及び『俄藏黑水城文獻』第 3 册所收 TK152（宋刻本、胡蝶裝、魚尾下版心題“八陽”）を除いた計上結果を記した。

『俄藏敦煌文獻』1-10 所收	**33** (Дx137, 230, 324+326, 376, 502, 509, 593+594, 628, 1009в, 1057, 1203, 1332, 1484, 1586a, 1747, 1799, 1869, 1955, 1809+2118, 1869, 1892+1894, 1958+2568, 2133, 2266, 2330, 2348, 2361, 2588, 2749, 2750, 2626 Φ177, 273)	
計	**135**	**3**

参考『上海博物館藏敦煌吐魯番文獻』所収 上博 48-10 佛説八陽經心咒

つまり管見の限りでは、現時點で分かっているものについていえば、全138點のうち、眞經の竺法護譯『佛說八陽神咒經』はわずかにS.2643b、P.3915e、P.3924の3點が見られるだけである。さらに殘りの135點について經題を有する場合、『佛說天地八陽神呪經』とするものはわずかに7點に過ぎず、他は『佛說八陽神呪經』『八陽神呪經』とのみ記す。

以上の状況から敦煌資料においては『八陽經』といえば、ほぼ『佛說天地八陽神呪經』を指す可能性が高いという點をまず確認しておきたい。では、『佛說天地八陽神呪經』とはどのような資料なのか。

まず、内容についていえば、眞經の竺法護譯『佛說八陽神咒經』が、佛が舍利弗に向かい、東方に一恒沙ごとに八つの國土があり一切の穢れがないとして、佛名、國土名を聞いてこれを受持し、讀誦奉行すれば三悪道に墮ちず、現世では種々の災難を逃れ、幸福を招くことができると說くのに對し、『佛說天地八陽神呪經』は、佛が無礙菩薩に對して、この經を三遍讀めば悪鬼は消滅し、病癒え、愚痴は除滅、家屋新築にも三遍讀誦すれば、朱雀玄武、六甲禁諱、十二諸神、土府伏龍など、一切の鬼魅は悉く害することがなく、また、父母臨終の日に子が七度經を讀めば、地獄に墮ちる罪を犯していても天上に生まれることができ、出産、結婚、殯葬などのときに三遍讀誦すれば、すべてにおいてその功德を得ることができると說くのである。内容を見れば、道教や儒教の影響を如實に反映していることが直ぐ分かる典型的な僞經である。この漢文僞經の成書時期は、從来の研究を総合すれば7世紀後半から8世紀前半とされる[10]。

また、牧田諦亮『疑經研究』[11]で、「(六) 療病・迎福などのための單なる迷信に屬するもの」に分類し、「生から死まで、死後までもの庶民生活の全般にわたって、經典讀誦の效驗をうたった佛說天地八陽神咒經のような疑經は、中國佛教史研究の上からは、無視することのできないものである」として、その概要を紹介したのが中國撰述疑經としての研究の嚆矢であるが、これに先んじて羽田亨「回鶻文の

[10]小田壽典「僞經本『天地八陽神呪經』の傳播とテキスト」、p.61。
[11]京都大學人文科學研究所、1976年、pp.78-79。

天地八陽神呪經」[12]により、ウイグル語譯の存在が知られ、その後、チベット語、西夏語などの諸語譯の存在が紹介される[13]に及んで、「アジア佛教史を考える上できわめて重要な僞經である」[14]と認識されるに至っている。

漢文テキストおよび諸語テキストの傳播については、小田壽典「僞經本『天地八陽神呪經』の傳播とテキスト」[15]に詳しい。

二、朝鮮における所藏状況

周邊地域への傳播状況については前掲の小田論文に詳しいので、ここでは朝鮮における『佛說天地八陽神呪經』の所藏状況について補足するに止める。大正藏所收のテキストは續藏を底本とし「鮮本」を用いて對校したとある。この「鮮本」とは何か。また、高麗藏には僞經『佛說天地八陽神咒經』は收録されていない。では、朝鮮において『佛說天地八陽神呪經』はあまり行われなかったのか、という疑問が生じる。

『韓國所藏中國漢籍總目』四 <子部>下 (延世國學叢書 52) によれば、8 機關全 18 資料が所藏されている。また、『佛說天地八陽神呪經』ではなく『佛說天地八陽精呪經』とする資料があるが、書誌データから見て『佛說天地八陽神呪經』と同じ内容と考えても良いだろう。そうすると 8 機關全 19 資料となる。以下に書誌データを所藏所ごとに引用[16]する。

1、義浄（唐）譯　敬和（朝鮮）註　木版本／寶盖山 石臺庵 1839 ／ 72 張　四周單邊　刊記：道光十九年己亥仲夏重刊鐵原寶盖山石臺雲藏版。

2、義浄（唐）譯　木版本／順天 松廣寺 1791 ／ 32 張　四周單邊　刊記：乾隆五十六年辛亥秋全羅左道順天松廣寺版。

3、義浄（唐）譯　木版本／天燈山 鳳停寺 1769 ／ 22 張　刊記：乾隆三十四年己丑（1769）秋嶺左安東府地天燈山鳳停寺開版

---

[12]『東洋學報』第 5 卷第 1、2 號（1915）、のち『羽田博士史學論文集』下巻（1958）に再録、その pp.64-135。

[13]小田壽典「トルコ語本八陽經寫本の系譜と宗教思想的問題」『東方學』第 55 輯 (1978), 同「龍谷大學圖書館藏ウイグル文八陽經の斷片拾遺」『内陸アジア・西アジアの社會と文化』1983 年、山川出版社；庄垣内正弘「中村不折所藏ウイグル語文書斷片の研究」『東洋學報』第 61 巻 (1979)，松澤博「敦煌出土西夏語佛典研究序說（３）――ペリオ將來『佛說天地八陽神呪經』の西夏語譯斷片について」『東洋史苑』63(2004) など多數の研究がある。

[14]木村清孝「僞經『八陽經』の成立と變容」p.272。

[15]『豊橋短期大學研究紀要』第 3 號（1986）所收、pp.61-74。

[16]大きさ、版心の情報など一部の情報は省略する。

4、義浄（唐）奉詔譯　木版本／隆熙 2(1908) ／ 31 張　四周雙邊　刊記：大韓隆熙二年戊申冬東菴信士姜在喜此經第十七張板闕[17]失故重刻印施五百卷

5、義浄（唐）奉詔譯　木版本／隆熙 2(1908) ／ 31 張　四周單邊　刊記：大韓隆熙二年戊申 (1908)……冬東菴信士姜在喜此經第十七張板闕[17]失故重刻印施五百卷

6、(天地八陽神呪經）義浄（新羅）奉詔譯　木版本／［刊年未詳］／ 32 張　四周單邊　刊記：乾隆五十六年辛亥 (1791) 秋全羅左道順天松廣寺版

以上六點國立中央圖書館藏

7、義浄（唐）譯　木版本／長興 天冠山 孝宗 8(1657) 刻　後刷／ 1 册 (68 張) 四周單邊　表題：天地八陽經　刊記：順治 14 年丁酉 (1657) 四月　日天冠山開版印　紙質：楮紙　合綴：佛說竈王經，佛說埃堀經

8、義浄（唐）譯　寫本／陜川 炳珪 (朝鮮) 寫　朝鮮後期寫／ 1 册 (10 張)　線装　表題：八陽經　刊記:慶尚南道陜川郡伽倻面海印寺講院内一問生炳珪 (朝鮮) 謹寫　紙質：楮紙

以上二點東國大學校所藏

9、義浄（唐）奉詔譯　木版本／佛智庵 英祖 9(1733) ／ 1 册 (140 張)　跋：雍正十一年癸丑 (1733)……佛智庵　附録:七星請儀文外

10、義浄（唐）奉詔譯　木版本／順天 松廣寺 正祖 12(1791) ／ 1 册 (32 張)　表題：八陽經　刊記:乾隆五十六年辛亥 (1791)……順天松廣寺板

11、義浄（唐）奉詔譯　寫本／純祖 16(1818) ／ 1 册 (25 張)　表題：經文册　寫記：丙子春

以上三點檀國大學校・羅孫藏

12、義浄（唐）奉詔譯，敬和 (朝鮮) 註　木版本／ 1 册 (70 張)　版心題:八陽經　跋：道光十一年辛卯 (1831) 華潭敬和　序：道光十一年歲次辛卯 (1831) 示象敬和　刊記：道光十九年己亥 (1839) 仲夏重刊鐵原寶蓋山石臺庵藏板

13、義浄（唐）奉詔譯　木版本／ 1 册 (32 張)　刊記：乾隆五十六年辛亥 (1791) 秋全羅左道順天松廣寺板

14、義浄（唐）奉詔譯　寫本／ 1 册　表題：八陽經

以上三點延世大學校藏

15、義浄（唐）譯　木版本／［刊年未詳］／ 1 册 (71 張)　表紙書名：八陽經　附録:安宅經，明堂經，王經，歡喜王經，恩重經，眞言要抄

以上奎章閣韓國本

16、義浄（唐）奉詔譯　木版本／［刊年未詳］／ 1 册　表紙書名：八陽經

[17]原文「門構えに西」に作る。

以上精神文化研究院

17、［編者未詳］義浄 (唐) 釋教文　木版本／不分卷 1 册　表紙書名：八陽經　板心書名：八

以上潤松文庫所藏

18、義浄 (唐) 譯　木版本／［刊年未詳］／1 册

以上雅丹文庫所藏

19、佛說天地八陽精呪經　義浄（唐）奉詔譯　木版本／［刊地未詳］［刊者未詳］［刊年未詳］／42 張　附録：佛說明堂神經，佛說竈王經、佛說歡喜竈王經，佛說安宅神呪經，佛說大父母恩重經，參禪曲

以上國立中央圖書館藏

上記のうち 1、12 にあげた版本は『韓國佛教全書』[18]第 10 册「朝鮮時代篇四」に收められているので比較的目にするのが容易である。

以上はあくまでも目録上の數値であり、小田論文で言及される 1980 年刊のソウル市販本の底本や『圖說 韓國の古書 本の歴史』[19]の中に寫眞添付で紹介される著者の安春根氏所藏の公の目録には掲載されない個人所藏のものなどを計上すれば、かなりの數になるだろうと豫想される。

また、小倉進平著『增訂補注 朝鮮語學史』[20]の關連箇所を引用すると、

（四三）佛說天地八陽神呪經（一巻）

各種の異版が存する。今左に重なるもののみを掲げる。

（イ）前條[21]順治十四年（西紀 1657）刊「大歳經」に合綴せられたもの。

（ロ）乾隆三十四年己丑（西紀 1769）秋嶺左安東府地天燈山鳳停寺開版のもので、「天地八陽經」諺解の外梵字諺文對照の「悉曇章」及び梵字諺文對照の「神妙章句陀羅尼」等を併録している。

（ハ）「六經［註］1 合部」と題せる書中の一篇名である。「六經合部」中の「安宅經」の終りに「上之十九年乾隆乙卯暮春開刊楊州天寶山佛巖寺藏版」・「南陽洪泰運［註］2 書」など記せるを以て見れば、本書も乾

[18]韓國東國大學校出版部、1989 年。

[19]安春根著、2006 年 11 月、日本エディタースクール出版部、P.61。筆寫本の例として、朱砂で書いた折本の寫眞が擧がっている。

[20]西田書店、昭和 61 年。引用は、「第三章 朝鮮語學」p.271。

[21](四二) 佛說廣本大歳經（一巻）順治十四年。漢文と其の諺文音譯との對照で「佛說地心陀羅尼經」・「佛說天地八陽神呪經」（體裁「大歳經」に同じ）等を併録し、巻末に「順治十四年丁酉四月日長興地天冠山開板」と刻してある。

隆六十年乙卯（西紀 1795）の刊行に係るものであらう。漢文と其の諺文音譯（懸吐無し）とを對照したのみで、意義の諺解は無い。

右の外「佛說竈王經」・「佛說地心陀羅尼經」等を合綴したもの（刊年月不明）、また「參禪曲」・「勸禪曲」等を附録とした隆熙二年（西紀 1908）版等がある。

［註］1　「六經」とは「天地八陽神咒經」・「歡喜竈王經」・「明堂神經」・「安宅神咒經」・「長壽滅罪護諸童子陀羅尼經」・「十二摩訶般若波羅蜜多經」を指す。

［註］2　洪泰運は嘉慶五年望月寺版「重刊眞言集」（第 259 頁參照）の筆者である。

さて、最初に述べた「鮮本」について、「すでに散佚したであろう」とする見方[22]もあるが、これだけの資料が残っているからには丁寧に對照すれば底本に關してもある程度見当をつけることができるだろうと思われる。

また、上記の如く擧げている資料が些か時代が下るものが多いにせよ、このような状況を見る限り朝鮮においても『佛說天地八陽神呪經』が大いに流行し「八陽經」と稱していたことは明らかであると確認できる。

三、題記に見る特徴

『佛說天地八陽神呪經』が「八陽經」という通稱を用いて、敦煌のみならず中原・周邊地域で非常に流行したことは從来の先行研究からも既に明らかではあるが、改めて前節一、二において現存の資料の状況から確認することができた。つぎに、では具體的にどのような形で受容されたのかを考察してみよう。

前述の 135 種の資料の中から、紀年と題記のあるものを次に擧げる。

S.1472

乙亥歲（855 or 915）[23]前四月四日，為亡阿姨師**寫**此經功德記，法界有情，同露司 (此) 福。

S.5373

清泰元年甲午歲（934）九月　日**寫**。

S.6667

天福柒年 (942) 歲，在人（壬）寅五月二十八日，蕤賓之月萌第（芽）十五葉，

[22]木村清孝前掲書　p.277。

[23]《敦煌遺書總目索引新編》では 855 年とし、池田温『中國古代寫本識語集録』（No.2168 p.457）では 915 年とする。藤枝晃「敦煌暦日譜」では、「前四月」という吐蕃期の言い方を殘し、2 月に閏がおかれたことを根據に 915 年說を否定している。ここは藤枝說に從う。

弟子令孤富昌**敬寫**八陽經一卷，奉為龍天八部，長為助護，盲者聾者，願見願聞，跛者啞者，能行能語，次願父母，日增日盛，亡過父母，不歷途之難，永充持念。

P.2098

于時同光四年（926）丙戌之歳四月四日弟子畫寶員，一為亡過父母作福，二為合家大小，无諸災障城皇役令，教多与合家作福。**寫**此經者，於教奉行。

P.3759

戊子（988 or 928）[24]年潤五月十六日，於弟子某甲，**持誦**八陽經，**書寫**摩利支天經，日誦三遍，日日持經，念戒依 (衣) 食，字 (自) 然日日家興。

北 7611（宇 10）

癸亥[25]年十二月張保（卷首）。癸未年（863）[26]八月二十日呉苟奴**自手書**記之耳（卷尾）

北 7619（黄 11）

三界寺僧沙彌海子讀八陽經[27]

北 7659（奈 14）

馮優婆夷[28]

北大 D102

甲戌年 (914 年) 七月三日，清信 佛弟子兵馬使李吉順，兵馬使康奴子二人, 奉命充使甘州，久坐多時發心**寫**此八陽神咒經一卷。 一為先亡父母神生淨土, 二為吉順等一行，無之災彰。 病患得差, 願早迴戈，流傳信士。

紀年の同定に判斷が異なる場合も見られるが、これらは 9 世紀半ばから 10 世紀末にかけて書寫されている。これは丁度、敦煌における吐蕃占領が終了して歸義軍期が始まった時期以降と重なる。五代の頃の敦煌佛教が庶民的道教習合の佛教となって普及していったことは夙に指摘されている[29]が、道教的色合いの濃い[30]『佛

[24]《敦煌遺書總目索引新編》では明記せず、池田温『中國古代寫本識語集録』（No.2239 p.471）では、928 年?とする。藤枝晃「敦煌暦日譜」に「戊子歳には、これ以前にも、九二八年と八六八年とが閏年であるが、それぞれ八月、十二月が閏月なので、宋でも五月に閏がおかれた九八八年と認めるのが妥當である」（p.431）とあるのに從う。

[25]“亥”字、池田温『中國古代寫本識語集録』では“丑”に作る。

[26]《敦煌遺書總目索引新編》では明記せず、池田温『中國古代寫本識語集録』（No.1968 p.424）は 863 年?とする。

[27]池田温『中國古代寫本識語集録』（No.2083 p.443）では年次未詳としながらおおかた 9 世紀だろうと推測している。

[28]池田温『中國古代寫本識語集録』（No.971 p.325）では年次未詳としながらおおかた 8 世紀だろうと推測している。

[29]塚本善隆「敦煌佛經史概說」『西域文化研究』第一、昭和 33 年、法藏館。

[30]『佛說天地八陽神呪經』の道教との關連は、前掲の牧田諦亮『疑經研究』にも觸れられている。抜粋すると、

「……佛教側においても、中國人の佛教としての立場から、翻譯經典には見られない、中國固有の

說天地八陽神呪經』がこの時期に多く書寫されたことは、まさしく其の状況を反映していると考えられる。

また、題記の内容であるが、盲聾跛啞者の障害が除かれることをいのるもの、亡くなった父母身内にたいして死後の安寧を願い、家中の無病息災幸福を祈るものがあり、北大 D102 のように命を受けて甘州へ出張に出る人たちの無事をいのるというものもある。何れにせよ『佛說天地八陽神呪經』を受持し寫經と讀誦を實踐することで現世利益を得ようとする民衆の厚い信仰心が表れている。

四、P.3759 調査報告

より具體的な状況を原件調査を通じてみることにする。紀年を有する資料中で最も新しい資料であると思われる P.3759 をとりあげる。

まず、ハード面からの記述であるが

形態：小册子、4.5 × 5.0 × 2.3cm
　　粘葉綴じおよび胡蝶装[31]
　　青布による包み装（表表紙に「南无観世音／佛說八陽經」）
　　（裏表紙に「佛說八陽經／佛說摩利支天」）

首題：佛說八陽神咒經
　　佛說摩利支天菩薩陀羅尼經

題記：前節參照

道家思想の影響を受けた延年益壽などの現世利益を加味して成ったいわゆる疑僞經典類の中には、道教經典を模倣し、佛教の名をもって民間に流布した經典類も多く見出されるのである。
後漢失譯とされる安宅神呪經（大正藏卷二一）は、離車長者が一族五十人とともに、佛の許に赴き、すこぶる憂色あり、佛がその何の故なるかを問うたところ、佛が居宅に臨降して、守宅の諸神及び四時の禁忌に勅して災禍を消滅せしめよと願い、佛がその請をいれて、長者の家にいたり、守宅の諸神を呼んでその妄動をいましめたことが說かれている。（註⑦　出三藏記集卷四には、安宅呪一卷を失譯雜經錄に入れているが、これは現行の安宅陀羅尼呪經（大正一九）で、安宅神呪經とは全く別のものである。安宅神呪經は隋の衆經目録（法錄）卷四衆經僞妄の項）しかしこの經文の中には、伏龍騰蛇、六甲禁忌、青龍白虎、朱雀玄武などのおよそ佛典には緣のない言葉が見（ママ）て、この經が中國古來の道教の經意をとりいれて佛說に假託したものであることが知られる。この安宅神呪經は、現行本では後漢失譯と標されてはいるが、もとより後世の假託であることは明らかである。しかもこの安宅神呪經は後漢失譯として入藏されていて、ながく眞經として遇せられてはいるが、この經が僞經に屬するものであることは、その内容からみても、いうまでもない。同様な例は義淨譯という天地八陽神咒經にも、日遊・月殺・黃幡・豹尾・五土地神・青龍・白虎、朱雀・玄武・六甲禁諱などの語を用いていることにも見られるのである。このような例は特に密教經典に多く見られるものであることは、周知のところである。（pp.346-347）

[31] ここでは、折り目部分を數ミリのりでとめた形式を粘葉綴じ、背面をすべて糊付けした形式を胡蝶装と呼ぶことにする。

實際手にするとその小ささに驚く豆本である。片方の手のひらにすっぽりと收まってしまう。録文からみた内容の特徴は、大正藏所收のテキストと比較すると佛教色が薄いなど、他のペリオ將来寫本とほぼ一致する。誤字が多く、字體近似によるものと、諧音によるものとが大部分を占める。例字を示せば以下の通りである。（もっとも右の列のように正しく書き直す場合もある）

A 字體近似（P.3759 / 大正藏）

元	/	无 (無)	皆	/	背	［正］	腫	/	種
磨	/	魔	眷	/	養		致	/	被
然	/	煞	右	/	舌		症	/	注
降	/	除	永	/	求		頒	/	須
營	/	榮	知	/	智				

B 諧音　とくに 49 以降急激に増加

豪	/	毫	弟	/	遞		愚	/	遇
諸	/	之	知	/	諸		取	/	趣
知	/	之	宅	/	擇		事	/	時
智	/	至	方	/	妨		為	/	唯
諸	/	智	利	/	理				

誤字の状況から見て、書き手はあまり教養の高くない層であると考えられる。また、同音、音通による書き誤りが多いのは、寫經時のありようを考える上で重要である。つまり、書寫から書寫へなのかあるいは口述から書寫へなのかを考察するひとつの手がかりとなるからである。但し、このような状況は他の『佛說天地八陽神呪經』の寫本においても同様である。また、書誌形態についても、『佛說天地八陽神呪經』は册子の形を取るものが多いといえよう。　この資料に特異なのはいわゆる豆本であると言う點だと思われる。攜帶するにも小さすぎるのではないか、或いは科舉試驗のカンニングペーパかと色々考えられるのであるが、ヒントは合綴される『佛說摩利支天經』にあった。丁福保『佛學大辭典』には、

> （天名）Marici，又曰摩梨支，摩利支天，摩利支菩薩，摩利支提婆。譯曰陽燄。
> 以其形相不可見不可取，故名。又曰華鬘。以天女之形相名之，常在日前行，有自在通力之天神也，若念之，則離一切之災厄，特為武士之守護神，密家所傳。此天之印咒，以隱形法為其至極。本行集經三十一曰：「摩梨支，隋云陽燄。」不空譯之摩利支天經曰：「有天名摩利支，有大神通自在之法。常行日前，日不見彼，彼能見日。無人能見，無人能知，無

人能害，無人欺誑，無人能縛，無人能債其財物，無人能罰，不畏怨家，能得其便。」天息災譯之大摩利支菩薩經一曰：「摩利支菩薩陀羅尼，能令有情在道路中隱身，非道路中隱身，眾身中隱身，王難時隱身，水火盜賊一切諸難皆能隱身，不令得便。」

とある。つまり、隠れることに長けていてあらゆる災難から身を守ることができる存在なのである。よって、『佛說摩利支天經』を常に身につけることで、まるでお守りのように身を守ることができると、考えられたのであろう。實際、經文の中に“佛告諸比丘：若有人能書寫讀誦受持之者，若著髻中，若着於（衣）中，隨身而行，一切諸惡，皆悉退散．無敢當者”とあり、髷や着衣のなかにいれて常に攜帶せよと勸めている。お守りとしての用途であるなら、丁度良いくらいの大きさだといえ、或いは髷の中にいれて攜帶するのであれば、更に小さいほうが良いかもしれない。いずれにせよ、ここでも、敦煌民衆の信仰心の厚さを見ることになる。

五、まとめ

後に元曲のなかで「やかましさ」の形容として定型表現に用いられる「八陽經」は、唐末から五代にかけて非常に流行した僞經『佛說天地八陽新呪經』が直接のルーツと考えられる。『佛說天地八陽神呪經』の廣範囲に及ぶ流行は敦煌においても例外ではなかった。ただ、完全に俗な語りや講談と同等に捉えられた中原とは異なり、民間における信仰心がまだしっかりと感じられる點に敦煌における佛教史の一面を感じ取ることができよう。これは、吐蕃治下に中原の武宗の會昌の廢佛令の影響をうけることもなく、歸義軍節度使期にあっても一貫して佛教が保護されてきた敦煌の特徴のひとつとしてとらえられよう。

［注記］2007 年 11 月 22 日の研究班における報告では、高田時雄先生はじめ、辻正博先生、齋藤智寛氏から適切なアドヴァイスを頂戴しました。紙面を借りて御禮申し上げます。また、BnF での調査に際して東方手稿部主任 Nathalie Monnet 女史はじめスタッフの方々に大變お世話になりました。ここに記して謝意を表します。

［使用資料］

『敦煌寶藏』第 1-14 輯（全 140 册）黄永武主編 台北：新文豐出版、1981 年 9 月～1986 年 8 月

『敦煌吐魯番文獻集成』上海：上海古籍出版社

『俄藏敦煌文獻』第 1-10 册、1992 年 12 月～1998 年 12 月

『法國國家圖書館藏敦煌西域文獻』第 1-34 册、1995 年 10 月～2005 年 3 月

『北京大學圖書館藏敦煌文獻』第 1-2 册、1995 年

『天津市藝術博物館藏敦煌文獻』第 1-7 册，1996 年 6 月～1998 年 12 月

『上海博物館藏敦煌吐魯番文獻』第 1-2 册、1993 年

『甘肅藏敦煌文獻』第 1-6 册、蘭州：甘肅人民出版社、1999 年

『浙藏敦煌文獻』浙江教育出版社、2000 年

Chinese Buddhist Electronic Text Association（CBETA）漢文電子大藏經

IDP 主頁：http://idp.bl.uk/

［引用・參考文獻］

（論文・專著）

塚本善隆「敦煌佛教史概説」『西域文化研究』第一、1958 年、京都：法藏館、pp.39-76

藤枝晃「敦煌暦日譜」『東方學報』第 45 册、1973 年、pp.377-441

牧田諦亮『疑經研究』1976 年、京都大學人文科學研究所

胡士瑩『話本小説概論』1980 年、北京：中華書局

小田壽典「僞經本「天地八陽神呪經」の傳播とテキスト」『豐橋短期大學研究紀要』第 3 號、1986 年、pp.61-74

小倉進平『增訂補注 朝鮮語學史』（復刻）昭和 61 年、西田書店（初版は 1964 年、刀江書院出版）

鎌田茂雄『新羅佛教史序説』1988 年、大藏出版株式會社

池田温『中國古代寫本識語集録』1990 年、大藏出版

川口義照『中國佛教における經録研究』2000 年、京都：法藏館

竺沙雅章『宋元佛教文化史研究』2000 年、汲古書院

吉川忠夫『唐代の宗教』2000 年、京都：朋友書店、京都大學人文科學研究所研究報告

康保成「“瓦舍”“勾欄”新解」『中國古代文學研究論集』2001 年、北京：中華書局

木村清孝「僞經『八陽經』の成立と變容」『東方學論集』（1997 年、東方學會）、『東アジア佛教思想の基礎構造』（2001 年、東京：春秋社）に再録、その pp.272-285

福士慈稔『新羅元曉研究』2004 年、大東出版社

安春根『圖説韓國の古書 本の歴史』2006 年、東京：日本エディタースクール出版部

（工具書ほか）

『佛書解釋大辭典』小野玄妙編、東京：大東出版社、1988 年

『敦煌遺書總目索引新編』敦煌研究院編、北京：中華書局、2000 年

『全元曲典故辭典』呂薇芬主編、湖北辭書出版社、2001 年

『宋金元明清曲辞通釋』王學奇・王靜竹撰著、語文出版社、2002 年

『韓國所藏中國漢籍總目』（延世國學叢書 52）全寅初主編、首尓（ソウル）：學古房、2005 年

『韓國佛教全書』韓國東國大學校出版社、1989 年